

## 意識のハード・プロブレムについて生産的に議論するには

鈴木貴之 (Takayuki Suzuki)

南山大学

わたしが著書のなかで主張したのは、①意識のハード・プロブレムにたいする既存の応答はすべて失敗している、②表象概念を見直すことで、それらとは別の応答が可能になる、という2点である。

まず、ハード・プロブレムにたいする既存の応答としては、大きく分けると4種類のものがある。しかし、思考可能性論証に依拠して物理主義を否定する立場には、ゾンビの思考可能性はしかるべき思考可能性であるとはかぎらないという問題がある。物理主義は正しいが人間はその理由を理解できないという不可知論には、問題は理解できるが解決は理解できないという特殊な事態をハード・プロブレムだけに認めることになるという問題がある。説明上のギャップは物理主義的に説明可能であると考えられるタイプB物理主義には、意識経験だけに特殊な説明上のギャップを認めつつ物理主義を維持することは困難であるという問題がある。いわゆる表象理論には、意識経験を実現する表象を限定する条件を明確化することが困難であること、物理的性質と経験される性質の関係を説明するのが困難であること、意識経験の実在性を否定することになること、という3つの問題がある。

これにたいしてわたしは、表象理論の基礎となる表象概念を見直すことで、意識経験はすべて知覚経験であるという表象理論の重要な知見を生かしつつ、上記の3つの問題の解決が可能になると主張した。そのポイントは、①意識経験を実現する表象(本来的表象とわたしが呼ぶもの)は、絵や文字などのいわゆる表象とは本質的に性格を異にする、②本来的表象を持つことが意識経験を持つことにほかならない(ミニマルな表象理論)、③本来的表象を持つことは世界を独自の仕方でも分節化することであり、そこでは、事物の物理的性質がそのまま再現されるのではない(自然主義的観念論とわたしが呼んだ立場)、ということである。

このような見方からは、さまざまな帰結が得られる。たとえば、①意識の自然化とはどのような作業化について見直しが必要になる、②世界を知覚することと世界について思考することのあいだには重要な違いがある、③単純な生物も意識経験を持つ、といったことである。

わたしの提案にはさまざまな(場合によっては致命的な)問題があるだろうが、わたし自身にとって、そのことはそれほど重要な問題ではない。わたしが知りたいのはむしろ、わたしの提案はどのレベルで間違っているのか、ということである。もし、表象理論の知見を生かしつつ表象理論の見直しを図るという大筋が正しく、議論の細部が間違っているのだとすれば、修正は容易だろう。そうではなく、いわば戦術レベルではなく戦略レベルで根本的に方向性を誤っているのだとすれば、話は振り出しに戻ることになる。

著書でも述べたように、わたしは、いくつかの戦略は、意識のハード・プロブレムそのものを解決するためのよい戦略ではないと考えている。たとえば、ゾンビの思考

可能性について考察を深めるというような戦略はその一例である。思考可能性について考えることは、様相や思考の本性などについてさまざまな興味深い成果をもたらしてくれるかもしれないが、意識経験そのものについて実質的な解明をもたらしてくれるようには思えないからである。

したがって、意識経験に実質的な解明を与えようとする者は、より生産的な問いを立てる必要がある。わたしがその例として考えるのは、たとえば以下のようなものである。

- ・ゾウリムシやミミズは意識経験を持つか？
- ・三角形クオリアやネコクオリアのようなものはあるのか？ないとしたら、色や味と形や生物種はどう違うのか？
- ・視野の周辺はどのように経験されているのか？
- ・プライミングと意識的な知覚経験はどう違うのか？
- ・ワイン通になるとき、何が起こるのか？
- ・これらの問いに経験的に決着をつけることは可能か？不可能だとしたら、それはなぜか？

わたしが著書で試みたのは、このような問いに解答することを通じて、意識のハード・プロブレムの解決を図ることである。これは正しい戦略なのだろうか。